

# 第8回NUFS & NUAS 読書コメント大賞 (2024)

あなたの投票で「いいね!賞」が決まります。

コメントを読んで、一番「いいね!」と思った作品に投票してください。

一般投票で1位となった作品は「いいね!賞(一般投票)」として表彰します。

投票期間: **11月20日(水) ~ 11月27日(水) 14時** ※1人1票まで

※コメントは図書館HPや投票フォームでも確認できます。



↑投票フォーム

	書名 編著者名 出版社	コメント
【1】	<p><b>みどりいせき</b> 大田 ステファニー 歎人著 集英社</p>	<p>表紙を開いた瞬間から今までずっと悔しさが消えない。私には、こんなに人を惹きつける言葉を紡ぐ才能がない。 「みどりいせき」。まるで危険な薬物みたいな、強烈な中毒性のある小説だった。 最近よく聞く闇バイト。私には無関係で周りもたぶんそんなものには手を染めてないと思う。主人公の桃瀬もきっと同じだったはずだ。 悪いことをするときの背徳感がかえって高揚感を生む瞬間。けれど、ふと湧き上がるこれでいいのかという不安と焦燥感。そんな感覚が私にはわかる。桃瀬はどこか私自身と重なるところがあるのかもしれない。 この本の怖いところはそれだ。ずっと大人の、それこそこの本に出てくる「チル」や「キャバい」みたいな若者言葉の意味をいちいち調べないといけない人たちにはわからないかもしれないけれど、それがわかる私のような若者にとっては、これは他人事ではない。一度読んで確かめてほしい。</p>
【2】	<p><b>硫黄島上陸 友軍ハ地下ニ在リ</b> 酒井聡平著 講談社</p>	<p>日本は良い意味でも悪い意味でも平和ボケした国である。この本にはこのことを本当に実感させられた。政府は都合の悪いことは隠蔽し、社会は見て見ぬふり。被害者など1部の人が声を上げるが誰も見向きもしない。戦争もその1つである。 来年8月、戦後80年目を迎え、戦争は歴史上の出来事だと思っている若者も少なくはない。私もその1人であった。しかし、終わったことだと学校で知識を学ぶだけで本当によいのだろうか。 太平洋戦争末期で前線となった硫黄島での戦死者は2万人。うち半数が今もお見つかからない。けれど、遺骨収集団の派遣は減る一方。死を知らながらも国や家族のために戦った勇士を忘れ去ってしまうことほど虚しく悲しい終わりはない。 ある消防士は「遺族にとって何も帰らないことほどつらいことはない」といった。どんなに小さな声でも1人1人が声を上げることで、家族のもとに帰ることができ報われる人がいるのではないだろうか。</p>
【3】	<p><b>おちくぼ姫</b> 田辺聖子著 角川書店</p>	<p>いつの時代も乙女の憧れは、ピンチに必ず駆けつけてくれる頼りがある王子様。そんなの夢の国にしかないって?いいえ、日本文学を侮る勿れ。日本にもいるんです。しかも平安時代に。白馬ではなく牛車に乗った、王子様ではなく少将ですけれど、聡明な貴公子であること請け負い。 本作は「日本版シンデレラ」とも呼ばれる古典『落窪物語』を原典とする、継子いじめの物語。愛らしい姫様が麗しの貴公子と幸せになる、まさにシンデレラストーリー。加えて、シンデレラでは描かれない「めでたしめでたし」のその先、少将からの逆襲まで描かれていて爽快感マックスです。 難しい古典作品を、誰でも楽しめる現代文学に作り替えてくださるのが故・田辺聖子先生。高校時代に古典が苦手だった人でも、きっと楽しめます。 「ボーダーレス」の言葉のもとに、国境を越え、さまざまな作品に出会える昨今。あえて「時代」を超えて、千年前の日本を覗いてみませんか。</p>

	書名 編著者名 出版社	コメント
【4】	舟を編む 三浦しをん著 光文社	<p>「辞書は言葉の海を渡る舟だ」この言葉にはとった。私は普段何気なく発している言葉の意味や使い方を正しく理解しているのだろうか。急に自信が無くなり同時に恥ずかしくなった。</p> <p>近年では毎年のように新しい言葉が生まれては流行しており、いわば言葉は常に変化していく生き物の様である。だが、いつの時代も人に何かを「伝える」ための手段であったことだけは変わらないだろう。例えば「やばい」とはなにがどのように「やばい」のだろうか。相手にきちんと「伝える」ことの重要性は外国語を学んでいる私にとって、心にとめておくべきことだろう。と、考えるきっかけとなったのは15年もの間、辞書の編纂に奮闘し続けた玄武書房辞書編集部の人たちだ。彼らの性格は面白いほど違っているが、「舟」の完成という同じ目標がある。度々刊行が頓挫しそうになるのだが、その度に地道な作業と情熱で持ちこたえた。私は彼らの編んだ舟に乗りたいと心から思えた。</p>
【5】	汝、星の如く 凧良ゆう著 講談社	<p>もしあなたが妻なら、夫の浮気を承認できますか？</p> <p>この本は「月に一度、私の夫は恋人に会いに行く」という衝撃的な書き出しから始まる。不穏な空気を纏って始まり、儚く星のように美しい愛で幕を閉じる。</p> <p>凧良ゆうさんの『汝、星の如く』に出会うまで愛とは何か、よく分かっていなかった。この物語には沢山の、様々な形をした愛が詰め込まれている。登場人物のほとんどは血が繋がっていないのにも関わらず、だ。愛とは、人生とは、血の繋がりの有無だけなのか？ 出会いと別れ、その全てを愛しく抱きしめたような作品だ。</p> <p>瀬戸内海での閉ざされた島での暮らしとそこで悩まされる人間関係の窮屈さ、対照的に目の前に広がる海の開放感、自由な思想。島と海の2つから織りなされるそのドラマに、スマホの存在を忘れるほど釘付けになった。生きることの自由さと不自由さ、充実と欠落、この作品からしか得られない感情に、10代のうちに出会えたことを幸せに思う。</p>
【6】	人魚の眠る家 東野圭吾著 幻冬舎	<p>子供の脳死、臓器提供といった重いテーマだったが、自分だったらどうするかと非常に考えさせられた。目を覚まさない愛娘を、機械を使用して動かし、満足気に自慢する母の行為を「母の狂った愛情」と帯紙では表現されているが、私には到底狂っているとは思えなかった。例え目を覚ます可能性が限りなく0%に近くとも、呼吸している娘を死んでいるとは思えないだろう。また、頭ではわかっていても、自身の心が「目を覚ますのではないか」という希望を手放せないであろう。娘が目覚めた時に他の子達と遜色なく動けるように、と願って諦めない母の行為は、紛れもなく誰にも否定できない真の愛情に違いない。ドナーを待つ子供らのために臓器提供を選択すべきだ、なんて他人事のような声はかけられない。人の死や愛情、駆け巡る利己的な思考と世論としての「善」に阻まれながら動く登場人物らの心情がとてモリアルな作品だった。</p>
【7】	珈琲いかがでしょう コナリミサト著 マックガーデン	<p>あなたが安らぎを求めるとき、口に運ぶものは何でしょう。</p> <p>甘いケーキやほろ苦い緑茶、人それぞれだと思います。</p> <p>日常を消費していると、明日着る服が決まらなかつたり、自分が分からなくなつたり、どうしても醜い感情に振り回されたり、悩みの種なんてそれこそ人それぞれで。</p> <p>これは、そんな悩みの種を持つ人びとと、そのもとに姿を現す珈琲の移動販売とが織り成す物語です。</p> <p>つかみどころのない店主が一杯一杯丁寧に淹れる珈琲にこころほぐされる人びとと、そっと時間をともにできます。それぞれの日常の主人公たちに、店主に、あなた自身に起こった出来事になにを思うでしょう。</p> <p>このごろ冷えるようになってきましたね。温かい飲み物でも片手に1ページ、歩いてみませんか。柔らかくてすこし苦い、ふと思い出して背中を預けたくなるそんな味にあなたも出会えるかもしれません。</p>

	書名 編著者名 出版社	コメント
【8】	斜陽 太宰治著 ゴマブックス	昭和22年、1947年は終戦直後を舞台にした没落貴族の話。 柔らかい物語調から始まるこの小説は、かず子の母の、陽の温かさのような優しさが滲む。母の温かさはその命が尽き果てるまで消えない。身体的な死をもって、その美しさと寛大さがじんわりと心に残るようだ。 そんな涙流すような話もまだ物語の1/4を残し、残りのページが少なくなるころに、かず子の怒涛の革命が待ち受ける。 人は言う。「人間は、みな、同じものだ。」そうじゃないから革命が起こるのだろう。 直治の最後の手紙に込められた彼の断続的な苦しみ、それは戦争という出来事がそうさせたわけではない、社会が生んだ悲痛。彼はどうかあがいても貴族だったのだ。 読み終えると、あの上品な母と一緒にいたはずのかず子が、実は下品で、その反対に、麻薬や阿片に手を出してまで民衆に扮したいと望む直治のほうこそが、母親に似た上品さをわきまえていたのかもしれないと感じる。
【9】	世界を無視しない大人になるために 僕が アフリカで見た 「本当の」国際支援 原貫太著 自費出版	「僕は、世界を無視しない大人になりたい。」今までこの言葉に、何度も戻ってきた。原貫太さんが本書を執筆したのは大学4年生の時である。アフリカの子ども兵は、戦うことしか教えられてこなかった。小型武器を握りしめた過去の記憶を内に抱え、連続性の中で生きる。子どもは「消耗品」であり、国際社会は正当化し続けていいのかわからない。言語化することをためらうほどの光景と、原さんのことばを追いつつ、世界の不条理の中にある自分を少し外から捉えた。私は初めて最貧国と呼ばれる国を訪れた後、張り裂けそうな感情を消化しきれないまま、悶々とした想いを抱えていた。その答えを見つけるように、4年間の学びと向き合ってきた。平和ボケしたここにいると、「世界を無視しないこと」を内側で肯定し続けてくれる何かを探したくなる。たまたまここで生きて、大学という宝箱で学ぶ特権を得た私は、確かにある限りなく小さな声に耳を傾けられる大人でありたい。
【10】	正欲 朝井リョウ著 新潮社	「多様性」と聞くと何を考えるだろうか。昨今LGBTQなど性や様々なものに向けての「多様性」という言葉をメディアやSNSなどで目にする。しかし、それらは所詮「多様性」の脳内の範疇でしか成立していない多様性。それってもしかするとすごく傲慢ではなからうか。この本の中にはそういった世にいう普通の「多様性」の範疇を超えた人たちが登場する。 ここでもう一度多様性について考えてみてほしい。しかし、それは結局自分の想像し得る多様性ではない。みなそれらの中で自分の人生を生きている。この小説には、理解されないとって世界に対して諦めている人、多様性を尊重しようとする人、様々な立場の人間が登場する。どんな立場の人間にも悩みや葛藤がありその中で日々必死に生きている。どんなことも受け入れる、なんていわゆる傲慢な姿勢は持たなくていい。ただ、どんな人間がいてもいいという気持ちだけは忘れずに私は生きてゆきたい。
【11】	安楽死を遂げるまで 宮下洋一著 小学館	人生をマラソンに例える人は多いだろう。誕生をスタート地点とするなら、ゴールは死だ。人生という名のマラソンを走る私たちは、本来ゴールテープがどこにあるのかわからない。この本はゴールテープの位置を決め、自らの手で切った人たちの話だ。 様々な苦痛を抱える人が自殺ほう助団体を訪ねる。その団体の代表は彼らの死に際に「美しい」という言葉を用いた。しかし、本を読む私の目に浮かんだ涙は純粋なやるせなさからだった。残された選別肢は死のみという彼らの覚悟に対して、傍迷惑にもまだ生きていた方が幸せだったかもしれないとそう考えてしまったのだ。こんな生に対するバイアスが私を含めた、死より辛い苦痛を感じたことのない人間に憑りついているのだろう。重いからこそ日常ではあまり考えない「命」。人生百年時代、病棟で寝たきりになるかもしれない我々に安楽死制度は重要なテーマであるということをお聞きしたい。

	書名 編著者名 出版社	コメント
【12】	<p>目の見えない人は世界をどう見ているのか</p> <p>伊藤亜紗著</p> <p>光文社</p>	<p>——知ることは変身することである——</p> <p>確信とともにこう語る著者は、視覚障害者との対話を通して想像力を働かせ、彼らの見ている世界を見ようと試みる。それは例えるならば、椅子の四本脚のうち的一本がないという「欠如」ではなく、三本脚が作る「全体」の世界。</p> <p>見えるからこそ、死角ができる。見えたイメージに固執してしまう。見える人が実は見えていないかもしれないこと、見えない人の方が実は柔軟に見ているのかもしれないこと——。</p> <p>見える人として生きてきた私の世界の捉え方が根底から揺れ動く。想像力を伴って知ろうとすることを放棄してきたのではないか。</p> <p>ぐらぐらと揺れる視界の中で、世界を捉え直す。それこそが、異文化理解への第一歩だと信じて読み進める。思索の止まらなくなる読書体験を、あなたにも。</p>
【13】	<p>歩く・知る・対話する琉球学：歴史・社会・文化を体験しよう</p> <p>松島泰勝編著</p> <p>明石書店</p>	<p>日本の中の「沖縄」と聞くと違和感はないが、日本の中の「琉球」となると急に違和感が出るだろう。誰もが「沖縄」をリゾート地や独特の食文化として捉えるが、その背景や歴史について深く知ろうとする人は少ない。なぜならば、沖縄に関する記述は教科書でも少なく、日本本土から物理的にも離れているため、私たちにとって「遠い存在」だからである。本書は、この「特異」な沖縄を歴史・言語・文化・社会の観点から網羅的に解釈し、日本の一部でありながら異なる側面を持つ沖縄を理解するためのガイドとなる。なぜ「琉球」から「沖縄」と呼ばれるようになったのか、沖縄人（うちなんちゅ）にはどのような文化や歴史があるのか、観光地としてだけではない沖縄の重要な側面を知りたい方にぜひ読んでもらいたい一冊である。</p>
【14】	<p>キッチン</p> <p>吉本ばなな著</p> <p>角川書店</p>	<p>なぜこの本のタイトルは「キッチン」なのだろうか。</p> <p>わたしはこの問いを常に考えながら物語を読み進めていた。</p> <p>まず、これほど繊細かつエネルギーを感じられる文章には今まで出会ったことがなかった。家族、愛、孤独、やさしさ。そんな単語だけでは言い表せないほど、この物語は透き通っていて、美しく、そしてあたたかかった。「この人の文章は水のようにわたしの中に入ってきて、やがて血液となって全身をめぐる」と思ったほどに言葉の全てが自分の一部になるような感覚だった。</p> <p>人間はすぐに他人との関係に名前を付けたがる。自分と相手との関係に名前が無いと不安になってしまうのだ。しかし、この本におけるみかげと雄一の「家族でも恋人でもない関係」が生み出す安らぎに触れて、名前のない関係は悪いことではない、と思えた。</p> <p>タイトルの「キッチン」とは何か。その答えを見つけた時、あなたはこの物語をより身近に感じられるはずだ。</p>
【15】	<p>賭博者</p> <p>ドストエフスキー著 亀山郁夫訳</p> <p>光文社</p>	<p>愛、憎悪、嘲り、喜び、怒り、悲しみ、錯綜、狂気。人間の欲望が渦巻く舞台の名は、ルーレットブルグ（ルーレットの町）。いっそ実在したのではないかと思えるほど人間味に溢れる登場人物たちは、衝動にかられ、刹那的に行動する。醜くも輝かしい彼らの在り方は、引き込まれるほどに魅力的だ。その上、まるでその場にいるかと錯覚するような濃密なカジノの描写は、さらに強く、人間の欲望を私たちの心に刻み込む。そして物語は、遺産の被相続人であり、危篤状態のはずだったアントニーダおばあさんの登場から一気に加速し、事態はまさしく混沌へと突き進む。二転三転する展開はまさに人生のように予測不能で、決して目を離すことができない。人間の欲望は斯くも複雑で、面白く、終わることを知らないと、この作品は私に思い知らせてくれた。金に群がり、賭博に溺れ、欲望と運命に翻弄される人間の面白おかしさをぜひご照覧いただきたい。</p>